

工業高校における古典教育の実際

竹 盛 浩 二一

1 はじめに

高校全入が各方面からさげばれ、広島県においては全国有数の高校進学率であるという。にもかかわらず、その底辺の内実は実に深刻なものである。生徒達（高校の制服を身につけた若者達）は、しかたなく学校に来て、何を求めるでもなく各々好き勝手に五十分の授業時間を過ごしている。生活指導に追われて疲れ切った教師達は、そのような生徒を相手に、勝負すべき場である教室においては、悪戦苦闘の実践を強いられている。

とりわけ、よりすぐられた生徒達が入学する本校（広島県立神田工業高校）では、赴任してこの二年間、私は国語教師たる前に、人間教師として生徒達の生活を心配し続けた。けれども、教室では、一国語教師であらねばならなかった。

本校の国語科では、三年間で「現代国語」七単位、「古典Ⅰ甲」二単位を履修させている。「古典Ⅰ甲」の二単位は、三年生で履修する。ここに、難題が生じる。工業高校であるために卒業生の約九割が就職して行くが、その就職は二期の半ばに内定してしまふ。

「古典をやって何になるんなら、先公ガ」このような荒々しい声が、拒否反応のひとつとして、生徒達から必ず発せられる。学習の

意欲と習慣のほとんどない彼らを前にして、古典学習の意義をいくらか唱えてみても始まらない。ともあれ、いかにして古典に興味を持たせ、授業に参加させていくかが、先決で危急の問題であった。

本稿では、その苦しい実践のいくつかを報告する。五十四年度三年生の電気科二クラス（五十一名）、食品工業科一クラス（二十名）、工業家庭科一クラス（二十八名）での実践である。そして、その報告をとおして、「実業高校」における古典教育はどうあるべきかについて、少しでも言及できれば幸いであると考えている。

2 長文の限定読みのために

——『今昔物語集』のばあい——

長い文章を、しかも古文を辛抱強く読むということは、私が教えている生徒の場合、至難のわざである。そもそも、教室の中で静かな態度を保って長時間座っていることが最高の苦痛であり、まして文字を読むことは日頃の習慣として位置づけられていないのであるから、そのような中で、長文の古文を取り扱うとなればどうすればよいのであろうか。

言い古されたことではあるが、一つには、教材の質が問題となる。話の展開が起伏に富んでいて、生徒を引きつけ得るものである

こと。そして、人間の真実をリアルに露出させていて、生徒を感動させるものであることが教材の条件となる。

しかし、それだけでは問題は解消されない。きわめて消極的な学習意欲しかない（ことわっておくが、あくまで現象的にである）生徒達が、相手としてしているのである。どうすればよいのか。

『今昔物語集』巻二十八第三十八話（久松潜一・吉田精一・佐藤謙三編「高等学校古典改訂版」角川書店17ページ）は、確かに学習者の興味をそそる教材である。在任中に財をたくわえた国守が、帰京の途上に深い谷に落ちたが、そのような生死のきわみにあつても手の届く限りの平草を取り、助けられて後もまだ残念がった——という説話である。現代有名政治家の悪事の逆パロディとして、みれば、学習者の興味は倍増するであろう。また、冷徹に現実を見据え批判する作者の姿勢に学習者は感心するにちがいない。しかもその批判が、ユーモラスな筆致を通して突き出されているだけに、痛烈なものとして受け取れるにちがいない。そう考えていた。

ただし、四月早々の入門期教科書の配列にしたがったので、これを扱うのであるから、それなりの方策が必要であつた。文法的な事項の理解を生徒に期待することが無理なことは、前年度に身をもって思い知らされていた。だから、この年度は、努めてその点は避けて通らうと思つていたし、そもそもこの入門期において、忠実に口語訳をすることは生徒の興味を半減させるにちがひなかつた。かと言つて、すぐさま古文を通して生徒をその世界に対峙させる勇氣を、私は持てなかつた。

そこで、口語訳の文章を用意した。福永武彦訳の『今昔物語』（

河出書房新社 日本古典文庫11）所載のものをプリントにして配布した。それを読ませたのではない。母親が子どもに絵本を読み聞かせるように、時おり説明を加えながら読んであげたのである。これで話の筋は確認できた。ただもう一度、生徒二三人に発表させて再確認する。ところが、ほとんど答えてくれない。しかたなく、次の時間に私がまとめて板書する。生徒の反応を引き出せない私は、なかば頭に血がのぼつてしまつてゐる。ついに、ロッキード事件を引きあいにし、この話は「平草事件」であると口をすべらせてしまふ。そして、信濃の国の民衆の姿、為政者の腹黒さを、生徒を相手に弁説する。このあたりから生徒は体を乗り出して来る。これで、この時間は過ぎてしまふ。三時間め、古文の本文を私がいていぬいに朗読する。次に生徒、指名してリレー式に読ませる。「歴史的かなづかい」の部分でとまどいながら、たどたどしく音読していく。ユーモアにあふれた筆致を念頭に置きながら読むことなど、望むべくもない。そして、朗読し終えてしまえば、彼らの態度は、「もううんだ。こんないやなこと、だるい。」と言わんばかり。すでに生徒の興味は消え去らうとしてゐるのである。

古文を読ませるために、その動機づけとして、私は生徒たちに多くを語りすぎたようだ。ために、実際に古文の本文を読み解く時には、生徒はそっぽを向いてしまふ。

そこで、本文を限定する。作者の鋭い批判の精神が込められている部分——八守、「僻事な言ひそ、なんぢらよ。宝の山に入りて、手をむなしくして帰らたらむこちぞする。『受領は倒るる所に土をつかめ。』とこそ言へ。」と言へば、……∨の部分から最後まで

部分——のみを読解するのである。「守」の貪欲な行動や考え方に
対し、「目代」と作者はそれぞれどう思っていたかを、表現にそっ
てまとめさせるのである。その途中には、「かかる死ぬべききはみ」
の部分から全文のあらすじを想起確認させる作業を含めながら。
申しわけ程度ではあるが、本文を読んだことになつたわけであ
る。「この部分は必ず中間テストに出題するぞ。」——このように、
馬の前に人參をぶら下げながら。

以上、とりとめもなく述べてきたように、本文を限定した読解は
最初から予定していたわけではない。生徒の反応はもちろん教室ご
とで異なるし、ひどい時には、教科外の問題で收拾がつかなくな
る。授業が円滑に進むかどうかは、生徒のその日の気分に大きく左
右されるのである。生徒は必ずしも学習する姿勢で教室に居るの
ではない。生徒のそのバイオリズムまで予測することはむづかしい。
なれば、教材分析だけしておいて、あとは即興で対応するしか方途
はない。ついつい、そう考えてしまふのである。そのような進退き
わまつた中で、この「限定読み(?)」なるものが登場した次第で
ある。

長文を辛抱強く読むということは、生徒にとってみればまさに苦
痛であるらしい。ならば、テーマを焦点化してやり、本文を限定し
て読解に入るといふ扱い方も、邪道であるようで、私の生徒にとつ
てみれば実は適した方法であるのかもしれない。古文読解の障害と
なる諸々の要素(文法・語彙・有識故実など)を、順次解消しながら
読んでいく方法よりも先に、以上述べてきた「限定読み」の方
法が、本校の場合には有効であるように思われて仕方がない。

3 導入のための駄弁

——『伊勢物語』のばあい——

『伊勢物語』は歌物語ではあるが、説話文学的な要素も含まれて
いる。さまざまな「愛」の姿が、簡潔で優雅な文体の中に叙情的に
展開されている。それを、一つの「お話し」として読んでいき、そ
してそれを物語中の和歌に収束してゆく詞書きとして位置づけると
いう取り扱いが可能であろう。

教科書には、第六段(「芥川」)、第九段(「東下り」)、第二
十三段(「筒井筒」)が載っている。はじめの二つを取り上げる予
定である(六月)。ただ、それにしても、ただちに本文に入るなら
ば、生徒には必ず抵抗が生じるにちがいない。その時、導入のため
にどうしたか。

私は、大学生時代以来、数回の失恋を経験した。ささいなものを
含めれば、それが失恋と言えるかどうかは別として、七回になると
思う。その七回もの失恋を、この場で子細に述べるつもりは毛頭な
いが、授業の中では、教師「竹さん」の恋物語として具体的に脚色
して話した。なかでも、二大失恋をでっちあげ(実話も含む)、二
つの失恋のパターンを生徒に印象づけようとした。第一のパターン
は、女性をデートに連れ出すが、先輩にうばわれて深い悲しみにあ
けられるという筋。第二のパターンは、永年親密に交際した女性が
家庭との板ばさみに悩んだあげく、男に別れを告げ、男は旅に出る
が忘れ難く、ますますその女性に愛着を持つという筋である。生徒
は、これが古典の授業かといぶかりながらも、おもしろく聞いている。

た。そんな駄弁をするのに二三時間は費したであらうか。

かくて、『伊勢物語』の学習指導が始まるのである。まず「芥川」である。「男」とは第一のパターンにおける教師「竹さん」の分身であり、生徒はひそかに喜びながら読み進めていた。文法的事項（助動詞「けり」、係助詞「なむ」、詠えの助詞「なむ」など）を折り込んでも、生徒はそれほど拒否反応を示さなかった。また、「草の上に置きたりける露を、『かれは何ぞ。』となむ男に問ひける。」の部分が、全文の中でどのような意味あいをもっているの

伊勢物語

芥川

黄、男ありけり。女⁵のえ得まじかりけるを、年を経てよはひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥川といふ川⁶を率⁷て行きければ、草の上に置きたりける露⁸を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女⁹をは奥に押し入れて、男、弓胡¹⁰藤を負ひて戸口をり。はや夜も明けなむと思ひつゝゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率¹¹て来し女もなし。足すりをして泣けどもかひなし。白玉か 何ぞと人の 問ひしとき 露と答へて 消えなましものを

(第六段)

◇「けり」(助動詞)

1.意味↓過去(…タ)
2.活用↓未然形
連用形
終止形
連体形
已然形
命令形

◇「え……打消表現」(トテモ…デキナイ)

か、そして最後の和歌にどういう効果を与えているのかなど、活気に満ちた学習を組織できた。また、先の第二の失恋パターンは、「東下り」に生かされていった。京都から遠ざかるにつれて、逆にますます女性を懐く気持ちを、生徒はすんなり理解したようである。ついには、教師「竹さん」の失恋に対し、冗談まじりに憐れみを示す生徒まで登場した。一応の成功の原因は、導入の他にも色々と考えられる。一つには、プリントを使用したことである。

○ 41 え得まじかりける↓ (とても手に入れることができそうにない。とても手に入れるべきでない。)

○ 44 え聞かざりけり。↓ (とても聞きつけることができなかった。)

◇ 「まじ」 (助動詞)

1. 意味↓打消の推量 (…デキソウニナイ。…ベキデナイ)
 2. 活用↓

まじくまじく	まじ	まじかる	まじけれ	○
未然形	終止形	連体形	已然形	命令形
まじからまじかり	まじ	まじかる	まじけれ	○

◇ 「なむ」 (係助詞)

1. はたらき↓意味を強める。 係り 結び (連体形)
 2. 連体形で結ぶ。…: 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。
 3. 省略できる↓ 「かれは何ぞ。」と男に問ひけり。

◇ 「なむ」↓ (…シテホシイ)。夜も明けなむと思ひつつ↓夜が明けてほしいと思ひながら

昔、ある男がいた。 () (幾年にもわたって求婚し続けていたが、やっとのことで盗

みだして、たいそう暗い夜に逃げてきた。芥川という川のほとりをつれて逃げて行ったところ、草の上に置いていた露を (見て女が)

「あれは何ですか。」と男にたずねた。(男は気のせくままだ返事もしないで、どんだん行くうちに) 行く先はまだまだ遠く、夜もす

っかりふけてしまったので、鬼が住んでいる所とも知らないで、そのうえ雷までもひどく鳴り出し、雨もはげしく降ってきたので、荒

れ果てた蔵の中に、女を奥の方に押し入れて、男は (弓を持ち) 胡籜を背負って戸口に立って (見張って) いた。 ()

() と思ひながら立っているうちに、鬼は早くも一口に女をたべてしまった。女は、「あれーっ。」と叫んだのだが、

雷の鳴る音に (まぎれて) 男は聞きつけることができなかつた。だんだんと夜も明けてきたので、蔵の中を見ると、連れて来た女もい

ない。地だんだを踏んで泣き悲しんだが、もうどうしようもない。(そこで男は)

「あの白く光る玉は真珠でしょうか、それとも何かほかのものですか。」と女がたずねた時に、 (返事をしなかつたが) 「あれは露

です。」と答えて、その露のように自分もはかなく死んでしまえばよかつたのに…。

(と、和歌をよんだ。)

△設問▽☆の部分、この文章の中で、どのような意味あいを持っているか。

伊勢物語

△東下り▽

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、三京にはあらじ、

東の方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人一人二人して行きけり。

道知れる人もなくて、惑まよひながら行つた。

水行く川の蜘蛛くも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。

その沢のほとりの木の陰におりて、乾飯かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。

それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上かぶにすあて、旅の心をよめ。」と言ひければ、よめる。

唐衣からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙落としてほとびにけり。

なほ行き行きて、武蔵の国と下総の国との中に、いと大きな川あり。それをすみだ川といふ。

その川のほとりに群むられるて思ひやれば限りなく遠くも来にけるかなと、わびあへるに、渡し守、「はや舟に乘れ、日も暮れぬ。」

と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。

さるをりしも、白き鳥の嘴くちばしと足と赤き、鷗しぎの大ききなる、水の上に遊びつつ魚いそを食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡

し守もりに問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

名にし負はば いざ言問はむ 残らず 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと

とよめりければ、舟ふねこそりて泣きにけり。

とよめりければ、舟こそりて泣きにけり。

このプリントを生徒はノートがわりにし、それに書き込みながら授業を受けた。また、板書も極力わかりやすくしたつもりである。これらのことも大きく左右したにちがいない。しかし、成功の一番の原因はやはり駄弁による導入であったと、私は今でも思っている。

言うまでもないことだが、授業は生徒と教師のふれあいの上に築かれる。まして本校の場合には、生徒との間に人情味あふれるぎすながなければ、生徒は授業そのものに乗ってこないし、学習の意欲がわかないのはもちろんのことである。教師の人間性を包み隠さず生徒に投げつけてこそはじめて、生徒は心を開いてくるものである。

4 生徒の落書きから

——「折り句」の応用——

『今昔物語集』と『伊勢物語』を扱った一学期が終了して、生徒にノートの提出を求めた。その中の一冊のノートから、落書きをみつけた。それをもとに、私は次のような文章を書き、『神工図書館新聞』に投書した。

「かきつばた」の波紋

竹盛浩二

『伊勢物語』の中に、「東下り」という一段がある。恋にやぶれた男が、京に居ることを嫌い、東国に下って行く物語である。

男は、三河の国（今の愛知県）の八橋を通り過ぎた。その橋のたもとの水辺には、かきつばたの花がうつくしく咲いていた。それを見た同行の男の、「かきつばた」という五文字を、各句の上に

つけて和歌を詠め」という注文に、男は次の詠歌で答えた。

かちとちも
唐衣 きつつなれにし つましあれば

はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ

（馴れ親しんでいた妻を都に残してきたので、はるばる遠くまで来てしまったこの旅を、しみじみ悲しく思うことよ。）

歌の右側に力点を付したとおり、男は「かきつばた」という五文字を折り込んで、悲傷の旅心を見事に表出した。人々は皆、それを聞き、感涙した。

男の「東下り」は更に続くのだが、今はとりあえず、ここで話を切りたい。

『伊勢物語』が歌物語と呼ばれているゆえんは、ここらで、すでに理解できるであろう。和歌のかもしれない出ず情感が、物語の幅を拡げているのである。否、そんな話はどうでもよい。『伊勢物語』論をめざして、筆を取ったのではない。

この「東下り」の一段は、古典の授業に取りあげた。教科書にも載っている。そして、先述した内容を生徒の前で話した。その後、ノートを提出してもらった。その中の一冊に、次のような落書きを見つけた。

髪をすく 君の姿に つり込まれ

はやる心を たえて殺そう

かすかなる 記憶の中に つづられた

母のひざもと ただ居りしなり

はっとさせられた。「かきつはた」の五文字を折り込みながら、澄みきった詩情を展開しているのだ。「髪をすく君」とは女性であり、その歌には男性の鼓動が脈打っている。「記憶の中」の亡き「母」の歌からは、幼時を懐かしむ情があふれている。ともかくにも、僕の心を満たしてくれた。ただ皮肉にも、この二つの歌の作者は女生徒なのである。ますます驚かされた。

古典学習の効果を云云したいのではない。ただ、あの「栗下り」の歌をきっかけに余技として記した一女生徒の歌二首に、僕の心がぐすぐぐられたという、そのささいな事実を、記念として書きとめておきたかったのである。

5 話すことのために

『故事成語』のばあい

漢字が読めず、また書けない生徒がたくさんいる。現代国語においてさえそのことが一番の支障であるのに、漢文ともなれば、全くのお手上げであるにちがいない。

昨年度は、『故事成語』の単元において漢文訓読法を丹念に指導し、その結果効果がほとんど顕れなかったことを業に、本年度はその扱いは漢詩の指導の中で試みる予定でいた。そもそも、すぐさま就職していく生徒達に、漢文を読めることが直接的にどれほどの意義があるのか、私自身疑問であった。

『故事成語』を漢文として扱わなかったもう一つの理由には、その時期（九月）、生徒にとって一か月後に待ち構えている入社試験があったからである。どの会社でも、故事成語は必ずと言っていい

ほど、その意味を問う形で入社試験に出題する。ところが、その読み方すらままならない生徒ばかりである。そもそも、生徒たちにとってみれば、その試験は鬼より怖いものであり、それを目の前にひかえて立ちすくんでいるだけなのである。まして、面接試験ともなれば、体が硬直して動かなくなってしまうにちがいない。何とかしてやらねばならない。

本年度私は、校務分掌上、ちょうど進路指導係であった関係上、過去の本校生徒が書いて提出した「入社試験受験報告書」から、そして市販の入社試験問題集から、類出の故事成語を整理していた。授業では、それをもとに、生徒各人に一語ずつ担当させた。つまり、授業のある二三日前に、『中国故事成語辞典』（角川小辞典20）と『後藤基己・駒田信二・常石茂編 中国故事物語』（河出書房新社）に載っているその語の説明部分を各人にコピーをして資料として手渡し、生徒はそれを参考にしながら、「故事」と「意味」をわかりやすくまとめ、何も見ずに自分のことばで、おもしろく発表すればよいのである。

この授業は、まじめな生徒よりも、普段私を手こずらせる生徒にとって、いきいきと（？）取り組めたようである。たとえば、ついには卒業おあずけとなったY・Yなどは、その時間に限って独壇場であった。彼は「漁父之利」を担当した。彼の発表（？）を再現してみよう。

おい、みんなよう聞けよ。あのう、昔々の大昔、山の分校に「竹さん」言う若い教師がおつてのう、こいつがまた、女好きな

んじや。光恵いうぶちきれいな生徒が廊下を歩いとったんじや。職員室から出てきた「竹さん」はそいつに一日ぼれしてのう、デートにさそおう思うて声をかけたんじや。そこへ、出羽いう悪い生徒が来て、「わしの女じや。」言うて「竹さん」とけんかになつたんじや。そこへのう、ジャジャン、わしが出てくるわけじや。光恵を連れてスカGで走り去るわけよ。これが本当の「漁父の利」よ。おい、わかったか。

私は当惑した。でも、授業中いつもはナイフで机を傷つけるか、あるいは歩きまわるかの彼が、こうまで楽しそうにしゃべつたのだから、それ以上望む気にはなれなかつた。「故事」の説明は、私の方で補足したのである。

教卓に身を乗り出して笑顔で語り続けるY・Yの姿は、今でも忘れられない。彼はついに三月一日の卒業式には出席できなかったけれど。

極端な例を出してしまつたようである。しかし、これが本校生徒の一つの側面でもある。当初の目標は、一応達せられたようである。発表する生徒は、つまりながら、どもりながらも何とかままとまりをつけて話して責任は果たした。聞く側の生徒達も楽しく聞き入つた。そして、三十八名のクラスであれば、三十八個の故事成語は一通り理解した筈である。

就職戦線は解禁となり、生徒達は不安におののきながらも受験のため各地に飛んだ。そして、帰って来てこう語りかけるのであつた。「先生、出とつたぞ。五つ出たが、四つは先生がやったものじ

やつた。でもできんかつた。」

6 読み切りの効果

——『枕草子』『徒然草』のばあい——

三学期ともなれば、生徒のほとんどは、就職が内定している。古典の授業など振り向きもしなくなつてくる。しかし一方で教える側としては、最後に何とかまとまりをつけたいと考えている。いろいろと思案した果てに、『枕草子』と『徒然草』による「一時間読み切り」の授業を思いついた。当然、教材は短文であることが条件となる。つまり、読解の手順がさほど複雑でないからである。もちろん、抽象的思考にかたよつたものは避ける。それらのことが、ある意味では生徒の興味をつなぎとめる要因にもなるにちがいない。

教科書に所載の『枕草子』第二百九十九段と、『徒然草』は教科書外の第十一段と五十二段が教材と決まつた。教科書にある『徒然草』の各段は、どうも扱ふ気になれなかつた。準備は、本文のあとに問題形式に似せた読みの手順を記したプリントを用意することである。その作成には、『問題集』『国語整理古典基礎編』（西日本書房）を参考にした。

枕草子

○ 作者は、一条天皇の中宮定子ちゆうぐやうていしに仕えた清少納言せいしょうなごんである。

○ 平安時代の女流文学……随筆

雪のいと高う降りたるを

雪がたいそう高く降り積っているのに、いつもとちがって御格子雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子みこうしを(A) いろいろに火をおこして、

まゐりて、炭櫃すすびに火おこして、

よもやま話などして、おおせい(1) につかえていた時に

物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、

(2) 「が、「少納言よ、香炉峰の雪はどんなだろう。」

香炉峰(3)の雪、いかならむ。」

とおっしゃったので、「(4) 「に御格子を上げさせて、」

と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾みす

が、御簾を高くまき上げると、「(5) 「がにっこりお笑いになる。

を高く上げたれば、笑わせたまふ。

他の女房たちも、「そういうことは私達も知っており、歌などに

人々も、「(6) 「さることは知り、歌などにさ

までうたうけれど、全然思いつきもしませんでしたよ。」

へうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほ、こ

は、やっばり、この中宮さまの女房としては、ふさわしいかたなの

の宮の人には、さべきなめり。」と言ふ。

でしょう。」と言う。

(第二百九十九段)

▼(1)傍線部(A)「まゐる」は、格子を上げることにも下げることにもいうが、この場合、そのどちらであるか。そすそのことを考える……順によんでゆくこと、三行目に、「御格子上げさせて」とあるから、この場合(上げた・下ろした)状態であることが判明する。

(2)①から⑤までの「」内には、人物が入るのだが、文章の中ではどのようなことを記入すればよからうか。「だれが」「だれに」が理解できれば、話のおもしろさがわかってくるにちがいない。△……↓『枕草子』の(平安女流文学の)表現の特徴▽

(3)傍線部⑥「香炉峰の雪」とは、二学期に学習したはずの、漢詩(テキP.72)の第()句を想起してのことばである。そして、

そのようになぞかけをされた「」は、その漢詩の表現の通りに、しかも行動でもって答えるわけである。その行動とは、右の本文でいえば、どの部分にあたるであろうか。その部分

分に……印をつけよ。△……↓中宮定子の漢詩文の知識・機転▽

(4)傍線部⑦の「笑い」からは、「」の対応が、⑧

のお気に召したということが読みとれる。また、そのことをあえて自ら書き記す「」の得意さも、⑨から味わせる。

△……清少納言の自意識▽
(5)傍線部⑩「さるごと」とは、具体的にはどんなことだろうか。

このことを、他の女房たちは、傍線部④のように、知識としては知っても、それを機転よく活用できなかったと感心するわけである。

最後の二行は、うれしさのあまり書き加えたのであろうが、いっそこれがない方が奥ゆかしい感じがしないでもない。だが、それをあえて書くところに、やはり作者清少納言の人間の反映があるのである。

徒然草

作者……吉田兼好 隨筆集
成立……鎌倉時代

神無月のころ

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふ者なし。閨伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まほりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。(第十一一段)

師走	霜月	神無月	長月	葉月	文月	水無月	草月	卯月	弥生	如月	睦月	月
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月	月

▼(山)現代語訳……()内に、その部分の訳を書き込んでみよう。

()のころ、栗栖野という所を通って、ある山里にたずねて入って行ったことがありましたが、()

()をふみわけて行くと、その奥に心細そうな様子で人が住んでいる庵があった。落葉の下に埋もれた窠から落ちる水の滴りの音の外には、()

()。閨伽棚には菊や紅葉などをさりげなく置いてあるのは、やっぱり住む人があるからなのであろう。()

()と、しみじみと感じ入って見ているうちに、向こうの庭に大きなみかんの木が、枝もたわむほどに実がなっているのを、(人に盗まれるのを用心してか)周囲を嚴重にかこつてあったのこそは、いささか興ざめで、()と思われたことだった。

②右の本文を前半・後半の二つに分けるとすればどこで切るのがよからうか。その所に/印をつけよ。

③前半部と後半部の内容をかんとんに述べてみよう。

(前半) (後半)

④右の本文中より、「係り結び」を抜き出してみよう。またそのはたらきも考えてみよう。

(係り) (結び) (働き)

(5)「重傍線部」「この木なからましかば」と兼好法師が思ったのはなせだろう。ここで注意せねばならぬのは、「周囲のかこいがなかったらよかったのに」というのではなく、「この木自体がなかったらよかったのに」と言っているそのちがいである。よく考えてみよう。

徒然草 (その2)

仁和寺にある法師

仁和寺にいたある僧は、年をとるまで石清水の八幡宮に参拝し仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思い立つ

て、ただ一人、() 参詣した。極楽寺や高良社などを拝んで、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、た。そして、かたわらの人に向かって、「永年の宿望をやと果たしかたへの人に会ひて、「年ごろ思ひつること、果

ました。これまで話に聞いていたよりずっと、(石清水の八幡宮は)たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、たふと尊くいらいしました。それにしても参りに来た人々が皆山へ上くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとにつて行ったのは、何ごとか山の上にあつたのでしょうか。()

山へ登りしは、何ごとかありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、までは行つて見ませんでした。」と語つたことである。山までは見ず。」とぞ言ひける。

ささいな事にも 案内者というものはありたいものである。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(第52段)

▼(1)「石清水」は、正しくは「石清水八幡宮」といい、京都の男山の山上にある神社だが、神仏混淆の、いわゆる「神宮寺」で、山のふもとに、極楽寺や高良などの、いわゆる末社・末寺がある。だから「石清水」を拝もうと思えば、山へ登らなくてはいけないわけである。このことを頭において、筋をまとめてみよう。

①主人公は、どこの、どういう人か。

②主人公の目的は、何だったか。

③ 主人公は目的を達したか。

④ 主人公は目的を達したと思っっているか。

⑤ なぜ、そういうことになったのか。その理由となる表現を右の本文中より抜き出せ。

⑥ 法師が「」内のことは話すとき、どんなようすで話したと思うか。くりかえし読んで想像してみよう。

(3) この文章からは、「笑い」が感じられる。それは筆者兼好が、誇張も説明も加えず、事実を客観的に述べているから、いっそうこっけいさが浮きぼりされてくるのである。↓(一人台点 おてん の失敗談)

(4) この文章には、軽い教訓が主題として記してある。その表現を抜き出せ。

実際は、一つの教材(一枚のプリント)を一時間で終ることはできない。しかし、その教材の質と、プリントの問題形式のために、じゅうぶんに二時間は生徒をつなぎとめることができた。古典を読むことと、その問題を解くことが一体となり、やっとのことで、生徒たちは古典に対して興味と親しみを少しは持てるようになった。

7 生徒の感想

年度末の一月、学年末テストの中で、「一年間の古典の授業をふり返って、感想を述べよ。」という課題を出した。点数には関係ないが、断りながら。

電気科、食品工業科、工業家庭科あわせて九十九名中、一名だけ白紙で、あとは全員何らかの感想をもらしている。そのなかから主なものを拾ってみる。深く考えさせられるものもあれば、思わず吹き出してしまいうものもある。

一年間古典の授業をやっていることがあったけれど、一番最初に3E1の教室に竹盛先生がきたときにはびしっと決めてなかなか思ったけれど、だんだん授業が進むにつれて、なんのことはない「おもしろい先生じゃ」と思うようになり、しまいはぼろがでてきて、なかなか授業としては、ほかの教科よりもおもしろかった。最初古典なんかむずかしいものだと考えていたのだが、やってみればどうってことなかった。(K・I)

一年間古典をやってきて、漢詩が自分で読めて自分で訳せるようになれたら楽しいと思った。はじめのころは、全々わけがわからなくておもしろくなかったけど、やっついていくにつれてけっこうおもしろい内容のものなども出てくるようになり、よかったですと思った。(T・O)

やはり一番おもしろかったのは、三学期にならった徒然草や枕草子などで、昔のことを大変こっけいにつくってあったので、何度もよみかえすうちに、内容が自然とおもしろく感じられる

ようになった。(S・O)

。来年も、この調子で、おちこぼれ生徒をたすける様に努力して下さいませ。竹盛先生、バンザイ、日本一(ただし女に縁のないミジメな先生)。(T・O)

。古典の時間、何を勉強したのか頭にあまりのこっていない。古典がほかの先生だったら、たぶん赤点だったのではないかと思う。たいへんむずかしい科目だと思う。(K・K)

。古典と言えば「むずかしい」という先入観があったが、一年間勉強してみても、そんなにむずかしくなかった。本でまとめて行くよりプリントでやって来てよかったように思う。卒業したらもう古典の教科書をひらくことはないかもしれないけど……(K・T)

。古典をならって、古典と言ってもみやすいようで、いろいろな意味を考えて見たりすると、はつきりわからないようなことばが非常に多かった。だから、自分自身、古典のことは、あまり頭の中にのこっていない。でも古典も、なかには、くり返し読んでは、よく意味がわかるとおもしろいものもあった。(K・N)

。漢文の読み方ぐらいしか今現在おぼえていない。何をならうてきたんか、今になって考えとります。なげけないこつてすな。まあ、ええでしょう。(S・N)

。こうように授業すれば、どの授業だっておもしろうなってくるんじやあないかな。もう三年でおわりじやけど。(Y・M)

。これからも、元気でやっつくり。早いことヨメさん深せ。(A・M)

。この学年末テストは今まででいちばんむずかしい。最後になっていじめるな。(K・O)

。わしは、古典とか国語みたいなものきらいじや。古典を一年間やったけど、わしの生活にはなんの変化もなかった。わしには、古典とゆうもんが、いまだにわからん。(M・K)

。古典を一年間学んできて、古典とはこんなものかと少しは、わかったような気もする。しかし、古典を学んで、なんのやくに立つのであろうかまったく理解にくるしむ。まあ、古典とはこういうものかと少しでもわかっただけでも良いと思う。(Y・S)

。国語だったら、文章をよめば少しは答えが書けるけど、古典は英語と同じでサッパリわからない。同じ日本人なのに、こんなにも文章が変わっているのには参った。(H・T)

。授業中はだいたいあそんだような気がしている。いろんなことをならったけどほとんどわすれてしまっている。しかし、漢詩の中で「国やぶれて山河あり、城春にして草木深し……」と言うのだけはふしぎに覚えている。(S・N)

。かんじばつかりの教科書を見て頭がいたくなりそうだったけど、内容がわかればおもしろかった。(H・S)

。古典をまなんでも、はつきりいって、やくには、ほとんどたたない。一ついっても神無月ということは、もうこのよのことばではない。いまは、神無月じやけいの1というか。いうまあが、いなかのほうはしらんけど。(M・Y)

。古典の授業がおもしろかったので、色々な本を読みました。()

徒然草・おとぎぞうし etc) (S・K女)

。古典を勉強してみて思ったことはやっぱり昔の言葉はむずかしいなあということだ。ただ読めばなんでも枕草子の清少納言と中宮定子のことでも、「香炉峰の雪……」という漢詩を知っているだけで意味がずっと深くなってくる。こういう風にとんどん意味が深くなってくるので古典はおもしろくなるのだらうけど、まだ一年しか勉強していない私には、先生が説明してくれてやっと意味がわかるというくらいで……。もう私は古典はすることもないと思うけど(？)先生いつまでも元気でネ。授業、楽しかったです。(T・T女)

8 おわりに

ふり返ってみれば、苦しい実践の連続であった。生徒達はもちろん赤子ではないが、そのむずかる彼らを、何が何でも引きとめておかねばならないのである。工業高校という現実の中で、しかも就職を直前にひかえた三年生を、古典の世界の門前に立たせ、その奥深くに導いて行かねばならないのである。

当然、指導の目標と方法が逆立ちしてしまった。何をめざして指導するのかということよりも、どうすれば生徒が逃げ出さないだろうかということに終始気を取られていた。ひとつひとつの教材においては、一応の目標は設定できる。だから、方法論は可能であった。しかし、食べようとしない者になせこうまでにして食事を与えねばならないのか、——つまり本質的には、古典をなぜ教えねばならないのかという点には、思いが至らなかったのである。

しかし、荒々しい若者の言動を目のあたりにして私の言葉への感性は鈍ってしまい、私自身が混乱してしまいうなかで、だからこそ、古典教育は必要であるのだと思えるようになっていた。過去の長い年月にわたって愛されてきた古典を、親しみを持って読むことによって、乱れ行く日本語を正していくための一つの指針が与えられるのではないか。一人ひとりの問題として、自らの言葉を静かにみつめ直す時、古典に学ぶ所は大きいにちがいない。そしてまた、現代の若者の鈍った感性を呼び醒ますのは、古典において他にはないのかもしれない。

人間は、科学的には進化しているかもしれないが、精神的には退化しているにちがいない。若者達の言動を見聞きすれば、その若者が自らを退化させているとしか思えてならないのである。

私の工業高校がそうであるように、少なくとも実業高校においては、古典教育は困難を極めているにちがいない。否、事態はもっと蔓延しているかもしれない。しかし、だからこそ、古典教育が必要なのであると私は言いたい。その必要性をまず見届けること。そして、ならば私達は古典をどう取り扱えばよいのかについて、絶えず模索し続けねばならないはずである。

(本学附属福山中・高等学校教諭)